ＪＡＣ北九だより NO５

社団法人　日本山岳会　北九州支部
Kitakyushu Branch of The Japanese Alpine Club

発行所：社団法人日本山岳会
北九州支部 事務局（日向）
小倉北区熊谷 4-14-17
TEL・FAX 093-592-0275
発行者：吉村　健児
編集人：蔵富幸夫・溝部忠増

皿倉山の薬草、薬木、「有用樹木園」を学ぶ

５２４７　三上 忠人

北九州支部主催の薬草を学ぶ集いは、「新入会員歓迎登山会」を兼ねて、去る７月２１日、皿倉山で開催しました。

この日朝、帆柱ケーブル麓駅に支部会員・一般参加者４５人が集合、先ず、吉村健児・北九州支部長より「無理の無い楽しい登山に心がけましょう」の挨拶のあと、全員ラジオ体操で身体をほぐし、皿倉山山頂に向かって出発しました。

３０数度の暑さの中、路傍の薬草・薬木を観察、九州大学薬学部講師で、北九州支部副支部長の秦野一彦先生より実に懇切丁寧な、解説を受けながら、約３時間かけて頂上南側斜面「八幡薬剤師会付属薬用・有用樹木園」へ。この間、質問も相つぎ、標本・押し花をつくる人もいました。この「薬草・薬木園」は、社団法人八幡薬剤師会で管理され、広さ約３，７８０㎡で薬草・薬木は、約１５０種も植樹され、下草刈りなども行き届き、今後ますます整備されて行くようです。

八幡薬剤師会の冨田敦夫会長もかけつけ、「１草・１木でも多くの薬草・薬木を知っていただき、山登りの楽しみを増やして下さい」と挨拶。また抽選で３人に、薬草解説書「皿倉山薬用植物誌」が贈呈されました。

その後、河内温泉におりて、「あじさいの湯」で暑気を洗い流し、そして冷たいジョッキで疲れを癒して帰途につきました。山好きの身障者の参加もあり、参加者の声は好評で来年の開催も期待されていました。

薬草解説書「皿倉山薬用植物誌」をご希望の方は実費２，０００円（送料別途）でおわけします。希望者は事務局までご連絡を。

読物 日本山岳会の発足

立ち遅れた近代登山

日本山岳会は２０世紀が始まってまもない１９０５(明治３８)年に設立された。ちょうど日露戦争の終わった年で、これはわが国において、近代的な登山が、この頃ようやく始まったということを意味している。これが早いか遅いかといえば、やはり意外に、あるいは予想よりはるかに遅いというべきであろう。明治維新からすでに４０年近く経過して、学術文化や科学技術などの輸入はひととおりすんでおり、その水準は大国ロシアと戦って、勝利を収めるというところまで高まっていたのだから。わが国への近代的な登山の導入は、なぜこんなに遅れたのだろうか。

当時の日本をみると、古代から行なわれてきた山岳信仰にもとづいた登山があり、それは江戸時代に盛んになり、明治期に入っても集団登山に姿を変えて、それなりに盛んに行なわれていた。男性だけでなく、女性もどんどん登るようになってきたのである。

しかしこうした登山は、当時の文部省の役人からはおそらく物見遊山の類にしかみえなかったのであろう。そのためお雇い外国人を連れてきたり、留学生を派遣したりして、登山というものを導入しようという考え方は、起こらなかったに違いない。あるいはもっと単純な理由で、近代的な登山などというものがあることをまったく知らなかったからかもしれない。

いずれにしても、在来型の信仰登山や、集団登山とは別の理念に立った登山、すなわち好奇心や冒険心にもとづき、スポーツ的な要素を多量に含む近代的な登山は、わが国には紹介されることがないまま、長い年月が経過することになった。

西洋の登山思想にもとづく登山が、わが国に紹介されるのは、１９世紀の末のことである。しかし、それからの日本山岳会の設立に至るまでは、偶然の果たした役割が少なくなかった。

登山思想を最初に紹介したのは地理学者の志賀重昂(しげたか)(1863-1927)であり、日本山岳会設立の功労者は小島烏水(うすい)(1873~1948)である。志賀、烏水の二人とも、ラスキンの影響を強く受けている点に、共通性がある。順番からいうと、まずラスキンの『近代画家論』(全五巻、1843~60)を読んで、尖った峰や氷河、湖、あるいは渓谷などのつくりだす自然の美を知った志賀が、それを日本に置き換えて『日本風景論』を書く。その本の中で志賀は、日本の風景のすばらすさを論じ、登山の効用を大いに鼓吹して、登山熱を煽った。その結果、これに刺激された烏水は、１９０２(明治３５)年、さっそく槍ケ岳の登山を試みる。そして槍ケ岳からの下山直後、烏水はたまたまウェストンの『日本アルプスの登山と探険』(1896)に出会い、紆余曲折の後、日本山岳会の設立に至るという順序である。

ウェストンとの出会い

烏水と一緒に槍ケ岳に登った友人の、岡野金次郎はある日、ある外国人がボーイに洋書を返却してこい、と言いつけているのに出会う。何気なくその本を手に取って、ページを開いてみたら、槍ケ岳の写真が目に入った。おやと思って書名をみると『日本アルプスの登山と探険』とある。念のためウェストンという著者の住所をさがしてみたところ、ウェストンが横浜のつい目と鼻の先に住んでいることがわかった。

岡野は、ウェストンが日本アルプスについて講演することを知り、それに出席してウェストンに会う。槍ケ岳に登ったことを告げると、ウェストンはたいへん喜び、自宅へ招待してくれた。岡野はウェストンの家を訪ね、そこで初めてイギリスに、アルパイン・クラブという山岳クラブがあり、雑誌を発行していること、大半の文明国には、山岳会があることなどを知る。次いで烏水もウェストンの

家を訪ね、日本にも山岳会をつくることを勧められる。

越後の豪農、資金提供

小島烏水がウェストンに会ったことをきっかけに、烏水は山の紀行文を『太陽』『中央公論』『早稲田文学』などさまざまの雑誌に出し、それが山好きな人たちを増やすことにつながっていく。しかしながら山岳会をつくり、外国のように雑誌を刊行するとなれば、まずは先立つものが必要である。烏水も岡野も一介のサラリーマンであるから、金はない。困っていたら、やはり『日本風景論』を読んだ越後の豪農、高頭仁兵衛(たかとうじんべえ)が『日本山嶽志』(1906年刊行)の原稿を携えて訪ねてきた。最初、志賀重昂を訪ねたところ烏水という人がだいぶ高い山に登っているらしいから、その人に相談して原稿を校閲してもらったらどうか、と勧められたという。結局、烏水は校閲を引き受け、代わりに高頭は年に1,000円という高額の資金の提供を申し出た。

そこへ強力な援軍が現われた。城数馬という東京の市会議員も務めていた弁護士で、後に、朝鮮の控訴院長になったという名士である。すでに白馬岳や八ケ岳に登っていたというから、山についても先駆者の１人といえるが、山岳会の社会的信用を高めるうえでたいへん効果的であった。

問題は会員の確保である。趣意書を配っても、山岳会というのは何をするのかわからないとみえて、なかには「小生こと鉱山事業に何の興味もこれなく、折角ながらお断わり。」といってきた者もいたという。山岳会というものを、いわゆる山師の団体と思ったらしい。烏水も、山の会をつくって山に登るとか、山を研究するとかいうことは、あまりに人間離れがしていて、一般の人には理解されようはずがなかった。と回顧している。

ただこの問題も、当時２２歳で東京高等中学の学生だった武田久吉や高野鷹蔵（たかぞう）(蝶学者)ら日本博物学同志会が会員に加わったり、東京地学協会に所属する地理学者の協力が得られたりして、解決に向かって動き出す。後に大学生などを中心とするエリートの会と見なされるようになる日本山岳会だが、発足当初は、「貴族院議員や大学教授も加わってくれたし、見ようによっては中堅がなくって、越後の大地主高頭氏、銀行員の烏水と博物学者の卵の学生たち、という風に、中流を抜いて上流と下層だけで山岳会ができたんだ」という状況であった。

１９０５年１０月設立へ

いずれにしても、１９０５年の10月14日、日本山岳会は烏水のほか、城数馬、高頭仁衛武田久吉、高野鷹蔵、河田黙(しずか)、梅沢親光(ちかみつ)の７人の発起人により設立されるのである。烏水は設立にあたって配布した「山岳会設立の趣意書」の中で、人と山との関わり合いや山岳研究の歴史についてふれた後、次のように述べている。

おもんみるに、山は実に不朽の寿を有する理想的巨人なり。天火を以て鋳られたる儀表(模範)的銅像なり。全国民の重鎮として立てられたる天然的柱石なり。之を謡ひ、之を究むるは、永世の大業にて、且つ何ぞ今日不急の事と謂はむ。本会ここに見るところあり、微力自から測らずして、先づ欧州の The Alpine Journalの例に倣ひ、山岳専門の機関雑誌「山岳」を創刊し、山岳に関する考察記事、一切を網羅し、山岳趣味と知識の啓発に任ぜんと欲す。然れども本会の事業たる、単に雑誌発刊の事に止むべきにあらず、山中に登山者宿泊の小舎を立つるも可なるべく、登山新路を拓くも可なるべく、全国に亘りて山岳案内記を出版するも可なるべく、各登山者間に連絡を通ずる方法を講ずるも亦可なるべし。

之を大成するは、一に趣味嗜好を同じうする、諸君子の援護に待つの他はある可らず。蓋し是れ実に国民的事業にして、決して少数人士の能く為し得るところにあらざればなり。

彼らが成立の趣旨を略記して、発足にあたって何を考えていたかが、よくわかる。(続)

郵便局に口座開設

役員会報告
溝部忠増

７月の定例役員会は１２日、大谷会館で開き、次の決定をしました。

(1) イベント運営などのシンボルとして、支部旗、役員用の腕章のほか、本部の法被を発注する。

(2) 会費納入などのため、郵送局に支部の口座を開設する。

記号:１７４１０　番号:５７６３４７６１
名称: 社団法人 日本山岳会 北九州支部

(3) 門司地区を中心に、初心者のための低山歩きを企画する。

(4) 日本山岳会本部のホームページに参加するとともに、支部独自のホームページを開設し、山行プランなどをＰＲする。

(5) 毎月第２火曜日開催の「小倉サロン」を**第４火曜日に、集会場所も「コール天」魚町店　☎　０９３-５２２-０５６５　小倉北区魚町１-２-２３(魚町銀天街の中)**に変更しました。

会員にも多数参加を呼びかける。

このほか、「皿倉山の薬草、薬木を訪ねて」の山行の運営などを話し合いました。

秋の山行プラン確定

役員会報告
溝部忠増

北九州支部の８月例会は、８日開き、７月の皿倉山で催した薬草、薬用樹木の研究会を総括するとともに、次の当面する方針を決めました。

(1) 秋の山行は、①福智山（８月２６日）②久住山（９月２３、２４日）③祖母山ウェストン祭参加（１１月２、３日）を催す。

(2) 本部会員を充実するため、推薦懇談会を８月２３日と９月６日に催す。

(3) 石川県で催される全国支部懇談会（９月２９、３０日)に、吉村支部長らが参加する。

この他、北九州支部の主催で、熊本・東九州・宮崎・福岡の各支部に呼び掛け、「九州各支部合同会議」開催の準備を進めることにした。

冬の信州を楽しむ集い

１１３９５　大場 常生

スキー・スキーハイク、ボード&温泉情報長野県下、主要スキー場のスタッフが、信州における２００２年のスキー場情報、スキーハイキングのコース設備等を紹介します。また、アフタースポーツの温泉や、特選郷土料理の情報も用意しています。

とき：１１月６日(火)１８：００開会～
ところ：北九州国際会議場イベントホール
《イベント内容》
第１部　スキー場紹介ビデオの上映
信州のスキー場を現地スタッフから説明
２００２年ウェア・用具のニューモデル紹介
第２部　信州の地酒と郷土食を味わい、現地スタッフ、同好の人達との懇親パーティ。
参加者大抽選会(航空券、宿泊券、特産品等)
参加費：１，０００円（当日会場で）
定　員：２００人（多数の場合は抽選）
参加申込：１０月２５日迄に、往復はがきで住所・氏名明記、３人まで連記を受付ます。
〒 802-0081 小倉北区 紺屋町 １３－１
長野県九州観光案内所
問合せ等　☎　０９３－５４１－０２５９

福智山清掃登山

１０２１０白石宣夫　１３３３８山下健夫

北九州市民憩いの場である福智山には年間約２万人が登ります。いつまでも山の自然を美しく守るため、清掃をしましょう。
キャンプツー恒例の清掃登山に協力します。
期　　日　１０月２８日（日）　雨天決行
対象山域　福智山（902m）山頂一帯
集合場所　鱒渕公園（鱒淵ダム下）
集合時間　８：３０より受付、専用ゴミ袋配布
昼食は各自持参、最後にお楽しみ抽選会あり
申込み等　☎ 093-521-3368（当日も受付る）

◇ ◇ 編 集 後 記 ◇ ◇

発行が遅れて申し訳ありません。読物等、新しい企画も始めます。皆さんのご意見と、山行報告等の原稿をお待ちします。（日向）